

メルマガ 「いいテク・ニュース」 季語に遊ぶ 2020 年 3 月 25 日 (Vol.158)

「アルフォンス・ミュシャ、絵画と俳句 その3 ミュシャの装飾パネルと俳句」

「アルフォンス・ミュシャ、絵画と俳句 その3 ミュシャの装飾パネルと俳句」



[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Alphonse Mucha - Zodiac.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Alphonse_Mucha_-_Zodiac.jpg)

1894 年、舞台女優サラ・ベルナールを描いた『ジスモンダ』で鮮烈なデビューを果たし、多くの商品の広告用ポスター也大評判となったミュシャ。

「民衆のための芸術」を目指した彼が次に手がけたのは、大量生産でき、庶民でも気軽に購入できるリトグラフ※作品の装飾パネルです。

ミュシャのデザイン性の高いポスターは広告用の文字が除かれ、装飾パネルに転用されることが多くありました。

「季語に遊ぶ」では前 10 回、西洋美術と俳句の組み合わせを試みてきました。

第 11 回の今回は「アルフォンス・ミュシャ、絵画と俳句 その3 ミュシャの装飾パネルと俳句」と題し、装飾パネルで最も人気がある『四季』『黄道十二宮』『夢想』を取りあげました。

一点物の美術画は貴族や富裕階級だけのものでしたが、大量生産された装飾パネルは芸術が特別なものでなく、ごく身近な民衆のものとなるのに大きな役割を果たしました。

そんなミュシャの装飾パネルの作品とその作品に合う俳句を選びました。

お楽しみください。

※リトグラフとは平らな石（現在では金属版も）に描いた図版を彫刻せずにそのまま印刷できる技法。語源はギリシャ語で石の意味の lithos から。

1. 連作『四季：春』



[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Alfons Mucha - 1896 - Spring.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Alfons_Mucha_-_1896_-_Spring.jpg)

1896 年 リトグラフ 103 cm × 54 cm

『四季』はミュシャが初めて手がけた装飾パネルで、不朽の名作ともいわれる作品。
四季それぞれが擬人化して描かれています。
『春』は金髪の女性が花にかこまれ、小鳥たちと歌い交し、緑の小枝で作ったハーブを奏でています。

ここでは春らしい雰囲気が溢れている句を選びました。

はるかぜや草木に動く日の光

高桑 闌更(たかくわ らんこう) (1726-1798)

季語<はるかぜ(春風)>で三春

春吹く風にもさまざまありますが、季語としての「春風」はやわらかく、のどかで、暖かい風。

美しき春日こぼるる手をかざし

中村 汀女(なかむら ていじょ) (1900-1988)

季語<春日(はるひ)>で三春

「春の日」には春の太陽 Sun をさす場合と、春の一日をいう Day をさす場合がありますが、「春日(はるひ)」は春の太陽、春の日の光をさします。

吾も春の野に下り立てば紫に (吾=あ) (下り=おり)

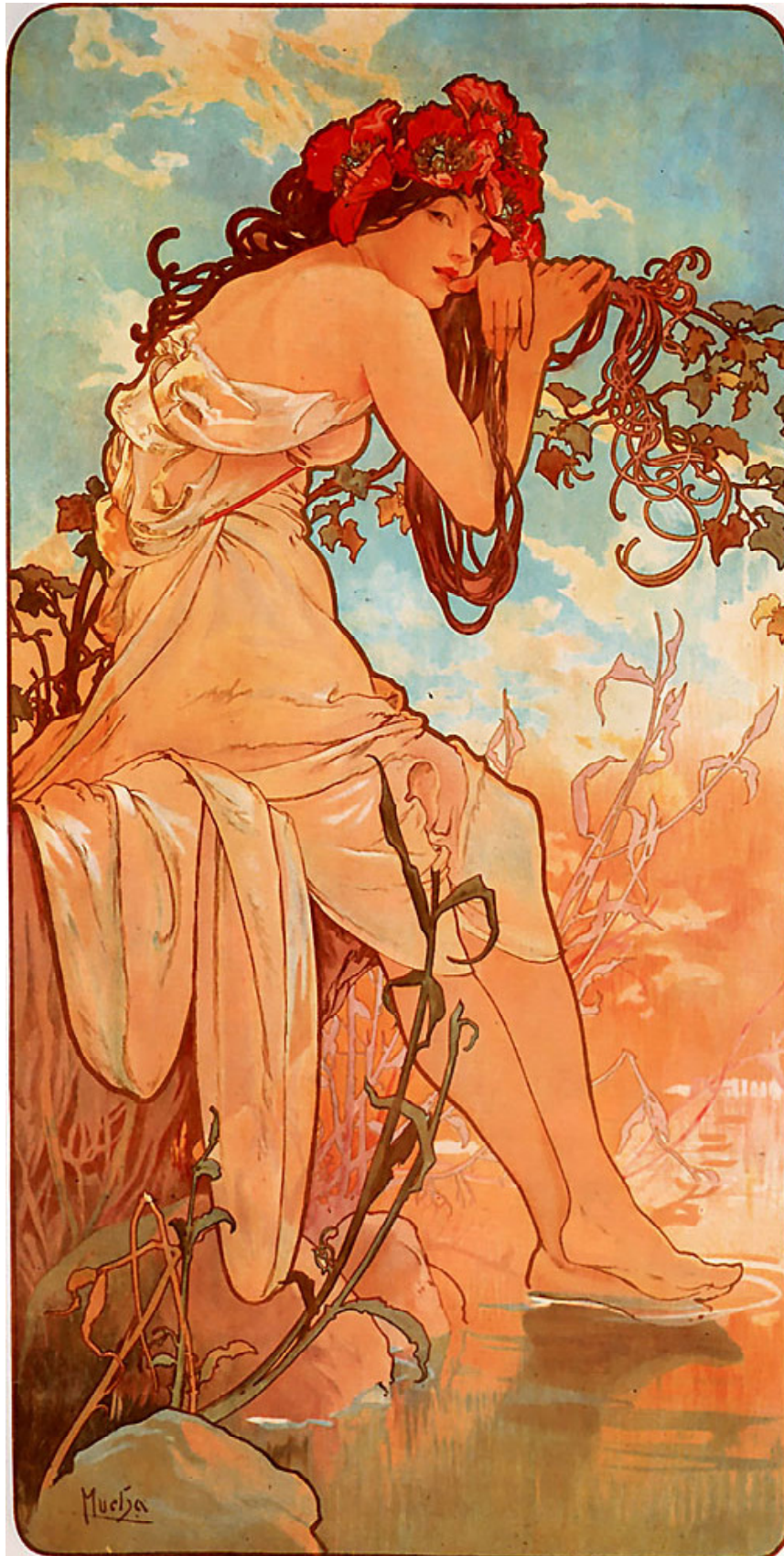
星野 立子(ほしの たつこ) (1903-1984)

季語<春の野>で三春

「野」は本来山裾などのゆるやかな傾斜地をさし、「山」に比べて人に親しく、「里」に比べて人の手の入っていない場所をさします。

「野」は人にとって最も身近な自然で、なかでも春の野は人に近い。

2. 連作『四季：夏』



[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Alfons Mucha - 1896 - Summer.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Alfons_Mucha_-_1896_-_Summer.jpg)

1896年 リトグラフ 103 cm × 54 cm

『夏』は赤いコクリコ（ヒナゲシ、虞美人草）の花の冠をつけたブルネットの女性が描かれています。木にもたれかかりながら、気怠（けだる）げに親指を口に当て、誘惑するような瞳を投げかけています。

ここではどこか気怠い印象のある晩夏を詠んだ句を選びました。

口紅にカカオの匂ひ夏逝かす（夏逝かす＝なつゆかす）

金久美智子（かねひさ みちこ）（1930-2019）

季語＜夏逝かす＝ゆく夏＞で晩夏

夏もいよいよ終わるという夏を惜しむ思いの感じられる季語。

何もかもこの涼風にまかせをり（涼風＝すずかぜ）

星野椿（ほしの つばき）（1930-）

季語＜涼風＞で晩夏

暑い日に吹く風は思わずほっとするひとときをくれます。

歳時記の上では七月の下旬が晩夏にあたります。

まだ暑い盛りに吹く涼しい風を涼風といいます。

晩夏光奪ひたる恋すでに褪す（晩夏光＝ばんかこう）（褪す＝あす）

大井さち子（おおい さちこ）（1960-）

季語＜晩夏光＞で晩夏

晩夏は一つの季節が去ってゆくというものの憂さのようなものを感じながらも、どこかに汗をかいた後の爽やかさもある季語です。

晩夏光は「夏の終わりの衰えぬ暑光」としている歳時記もあります。

3. 連作『四季：秋』



[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Alfons Mucha - 1896 - Autumn.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Alfons_Mucha_-_1896_-_Autumn.jpg)

1896年 リトグラフ 103 cm × 54 cm

『秋』は白菊の髪飾りをした赤毛の女性が葡萄の実を摘んでいる様子が描かれ「実りの秋」を表現しています。

葡萄はキリスト教においてはキリストの血と見なされ、またギリシャ神話においては酒神、豊穡の神バッカスの象徴でもありました。

ヨーロッパの文化において葡萄は実りの豊かさを感じさせるモチーフです。

ここでは仲秋の季語である「葡萄」「ぶだふ」を詠んだ句を選んでみました。

葡萄うるはしまだ一粒も損はず（損はず＝そこなわず）

高浜虚子（たかはま きょし）（1874-1959）

季語＜葡萄＞で仲秋

葡萄は古くから世界各地に存在し、紀元前 2500 年ころのエジプトの壁画などに栽培や醸造の様子が描かれています。

日本にはブドウ属の植物が 6 種原生し、古名は「えびかずら」といいます。

1186 年、後鳥羽天皇のころ、現在の山梨県で自生葡萄の中から良い種を見つけ、増殖して甲州葡萄ができたとされています。

フランスからの輸入種の青く大粒のマスカット、アメリカ原産の黒色のキャンベル、赤紫色のデラウェア、日本で作り出された深い紫黒色の巨峰など彩りも美しく、秋を代表する果物の一つです。

ぶだふ摘一房ごとに目を細め（摘み＝つみ）

森田峠（もりた とうげ）（1924-2013）

季語＜ぶだふ＞で仲秋

葡萄踏むバッカス白きあしのうら

仙田洋子（せんだ ようこ）（1962-）

季語＜葡萄＞で仲秋

4. 連作『四季：冬』



[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Alfons Mucha - 1896 - Winter.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Alfons_Mucha_-_1896_-_Winter.jpg)

1896年 リトグラフ 103 cm × 54 cm

『冬』は薄緑の衣を羽織った女性が両手で小鳥を包みこむように優しく温めながら、ふと気づいたように視線をこちらに向けたところが描かれています。
木に雪が積もったさまや、背景の奥行きや遠近法を感じない描写は、当時パリで大流行していた日本の浮世絵の影響が出ています。

ここでは本来は晩秋の季語である「小鳥」を冬の季語と合わせて詠まれた冬の句を選びました。

聲氷る庭の小鳥や寒の雨（聲＝こえ）

正岡子規（まさおか しき）（1867-1902）

季語＜寒の雨＞で晩冬

寒中に降る雨のことを指し、冬の雨のうちでも特に期間を寒の内と限定したもの。

冬の雨より、寒さ、冷たさもより厳しく、語感も寒々としています。

寒に入ってから九日目に降る雨を特に「寒九の雨」といい、その年の豊作の兆候とされています。

肩に乗る小鳥のかろさ雪降り

井上雪（いのうえ ゆき）（1931-1999）

季語＜雪＞で三冬

雪は「春の花」「秋の月」と並んで日本の美の代表。

雪を美しいと感じるには理由があり、古代の人々にとって天上から舞い散る白い雪は人智を越えた現象と映り、この驚くべき現象を稲作を司る神の便りで、雪は豊作の予兆ととらえていました。

ちなみに、ユキのユ（斎）は神聖という意味になります。

冬萌や小鳥の嘴に空気穴（冬萌＝ふゆもえ）（嘴＝はし）

宮坂静生（みやさか しずお）（1937-）

季語＜冬萌＞で晩冬

まだ冬のうちに木や草の芽が萌えだしていること。

日だまりの枯草の中にいち早く萌え出した緑をみとめると、春を待つ気持ちとあいまってほのぼのとした気分になります。

大地が新しい命を確実に育てていることの証しを見るようで嬉しくなります。

5. 『黄道十二宮』



[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Alphonse Mucha - Zodiac.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Alphonse_Mucha_-_Zodiac.jpg)

1896年 リトグラフ 65.7 cm × 48.2 cm

黄道とは、地上から見た太陽が天球上を動く軌跡のこと。
それを十二等分し、それぞれに星座をあてはめたものが「黄道十二星座」です。
それぞれの星座が各月に対応するため、この作品は当初、カレンダーとして用いられました。
精微で華やかな髪飾りと首飾りをつけ、渦巻くような長い髪の女性の優美さ、背景のモザイクや幾何学模様、繊細な色彩など非常に完成度の高い作品です。

ここでは「黄道」と星座の「水瓶座」「乙女座」を詠んだ句を選びました。

日の黄道月の白道鷹渡る

福田蓼汀(ふくだ りょうてい) (1905-1988)

季語＜鷹渡る＞で三秋

鷹は種類が多く大鷹や隼など、一年中日本にいる留鳥もありますが、冬鳥として北方から渡来する鷹も多くいます。

夏鳥として日本へ渡来して繁殖する差羽（さしば）は秋には南方へ飛去します。

渥美半島伊良湖崎、大隅半島佐多岬、宮古島などでは一日に数千羽の渡りが見られることもあり壮観です。

しかし、近年は繁殖の地が開発とともに姿を消しつつあり、差羽の数も減少しています。

六月の水辺にわれは水瓶座

文挾夫佐恵(ふばさみ ふさえ) (1914-2014)

季語＜六月＞で仲夏

立夏が陽暦では五月六日ころにあたるので、六月はすでに夏のなかば、仲夏の時候になります。

野山は緑が濃くなり、川では鮎の解禁、田園では麦秋から田植えの時季へなど、すべての風物が夏の景色となります。

乙女座の男集まれ花野の天

原子公平(はらこ こうへい) (1919-2004)

季語＜花野＞で三秋

秋の草花が咲き誇り、かつ咲き乱れている野のこと。

人の手によって作られたものではなく、秋の七草をはじめ、吾亦紅（われもこう）、竜胆（りんどう）、松虫草、野菊などが咲く野。

はなやかな反面、吹く風も秋らしい風情となり、昼の虫なども鳴いて寂しさ哀れさもどこかに潜んでいる野。

6. 『夢想』



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Alfons_mucha_obraz_1.jpg

1898 年 リトグラフ 72.7 cm × 55.2 cm

『黄道十二宮』とともに、この作品もはじめはシャンプノワ・リトグラフ工房の社用カレンダーとして制作された典型的なミュシャ・スタイルのポスターでした。しかし、図柄の人氣があまりにも高く、カレンダー用の文字を削り、装飾パネルとして売り出されたものです。ミュシャが得意とした円形装飾を背景に美しい刺繍の施されたももいろのドレスを着た乙女が描かれています。その膝には風景か花が描かれているであろうと思われる画集のような見本帳を置き、夢見るような眼差しを投げかけています。

ここでは、ももいろのドレスから「ももいろ」「刺繍」を、タイトルから「春の夢」を詠みこんだ句を選びました。

処暑の花空ももいろにして溢れ

長谷川かな女(はせがわ かなじょ) (1887-1969)

季語＜処暑＞で初秋

二十四節気の秋の二番目で、太陽暦では八月二三日ころ。

「処」は収まる意味です。

朝夕は涼風が吹き渡り、暑さもようやく和らぐ時季。

農産物もそろそろ稔りはじめて、収穫の季節ですが、このころは台風襲来の特異日で、暴風雨に見舞われることも多くあります。

刺しすすみ刺繍の色も春深し

朝倉和江(あさくら かずえ) (1934-2001)

季語＜春深し＞で晩春

桜の季節を過ぎると日に日に「春深し」の感が強まります。

草木の花は盛りを過ぎ、さみどりの野山には霞(かすみ)が立ちこめ、空では雲雀(ひばり)が啼きます。

春もたけなわを過ぎて、いよいよ深まった四月後半ごろのこと。

追ひかけて振り向かぬひと春の夢

田辺レイ(たなべ れい) (1935-)

季語＜春の夢＞で三春

春の眠りの中で見る夢のこと。

夏の夢、秋の夢、冬の夢などの季語はないことからわかるように、「春眠(しゅんみん)」「春愁」などのイメージにつながり、たっぷりとした情趣が背後に感じられます。

そしてもとより、うたかたの春の夜の夢といった艶やかで甘い感傷もともないます。

私も発想を飛ばして、画集が置かれている乙女の「膝」に注目し詠んでみました。

ひざまくらわれ至福へと朧へと（朧＝おぼろ）

白井芳雄

季語＜朧＞で三春

春は大気中の水分が増加し、万物がかすんで見えることが多くなります。

その現象を昼は霞というのに対し、夜は朧といいます。

ぼんやりとかすんだ夜気のなかでは、ものの輪郭も色も音もどこか奥ゆかしく優しげです。

萌え出た若葉の香も漂いそうな「草朧」。

静かな波に洗われている朧夜の海の岩は「岩朧」。

どこからともなく辺りに響く鐘の音は「鐘朧」などと用いられます。

語感も柔らかく、曖昧さをよしとする日本人の美意識にかなった言葉です。

今回は「アルフォンス・ミュシャ、絵画と俳句 その3 ミュシャの装飾パネルと俳句」をお届けしました。

全3回続いた「アルフォンス・ミュシャ、絵画と俳句」は今回で終了します。
半年間ご愛読ありがとうございました。

全体を通じての参考文献、出典：島田紀夫著

『アルフォンス・ミュシャ

アール・ヌーヴォー・スタイルを確立した華麗なる装飾』（六耀社）（1999年）

ISBN4-89737-366-2 C0071

ミュシャ・リミテッド編・島田紀夫監訳

『アルフォンス・ミュシャ 波乱の生涯と芸術』（講談社）（2001年）

ISBN4-06-210541-1 C0071

千足伸行著

『ミュシャ作品集-パリから祖国モラヴィアへ-』（東京美術）（2012年）

ISBN978-4-8087-0946-4 C0071

海野弘解説・監修

『アルフォンス・ミュシャの世界 2つのおとぎの国への旅』

（パイ インターナショナル）（2016年）

ISBN978-4-7562-4789-6 C0071

大友義博監修

『もっと知りたいミュシャの世界』（宝島社）（2019年）

ISBN978-4-8002-6906-5 C9471

ミュシャ財団監修

『ミュシャ 華麗なるアール・ヌーヴォーの世界』（小学館）（2019年）

ISBN978-4-09-682288-3 C0071

飯田龍太・稲畑汀子・金子兜太・沢木欣一監修

『カラー版 新日本大歳時記 愛蔵版』（講談社）

ISBN978-4-06-128972-7

『角川俳句大歳時記 新年』（角川学芸出版）

ISBN4-04-621035-4 C0392

『角川俳句大歳時記 春』（角川学芸出版）
ISBN4-04-621031-1 C0392

『角川俳句大歳時記 夏』（角川学芸出版）
ISBN4-04-621032-X C0392

『角川俳句大歳時記 秋』（角川学芸出版）
ISBN978-4-04-621033-3 C0392

『角川俳句大歳時記 冬』（角川学芸出版）
ISBN4-04-621034-6 C0392

本間美加子
『日本の 365 日を愛おしむ』（東邦出版）
ISBN978-4-8094-1652-1 C0076

参考サイト：フリー百科事典ウィキペディア (Wikipedia)

最後までお読みいただきありがとうございました。

(株)技術情報センター メルマガ担当 白井芳雄

本メールマガジンのご感想や本メールマガジンへのご意見・ご要望等 melmaga@tic-co.com まで、
どしどしお寄せ下さい。

株式会社 技術情報センター 〒 530-0038 大阪市北区紅梅町 2-18 南森町共同ビル 3 F TEL : 06-6358-0141 FAX : 06-6358-0134 E-mail : info@tic-co.com
